【令和５年度第２回企画展併催】R5.7.14～10.29

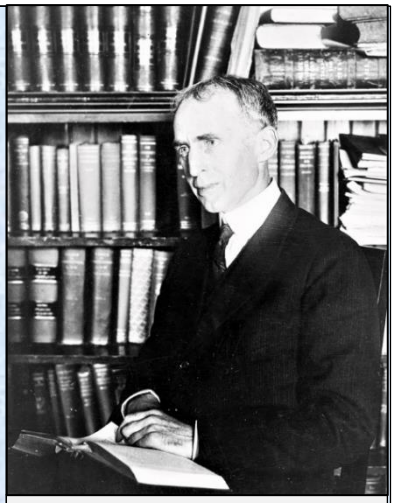
シリーズ後藤新平人脈考⑪　ビーアド

「世界で一人の理想の政治家を発見した。それは後藤子だ。何となれば、科学に基礎を置くということが20世紀の政治家の最大要件である。後藤子はその唯一人である。」と新平を激賞し、相知り相許す仲となったビーアドを紹介。

チャールズ・A・ビーアド（Charles Austin Beard）

アメリカ合衆国インディアナ州出身。政治学者、歴史家。1898年デポー大学卒業後、イギリス・オックスフォード大学に留学。一旦帰国して同窓のメアリー・リッターと結婚、夫妻で再びオックスフォード大学で学んだ。1902年帰国してコロンビア大学で政治学と歴史学を学び、1904年学位を取得。1915年コロンビア大学教授となり、アメリカ憲法発達史と政治学を講じた。1913年に出版した『アメリカ憲法の経済的解釈』は学界に衝撃を与える問題作となった。17年バトラー総長の大学人事に抗議して辞職、ニューヨーク市政調査会の理事に就任。1922年後藤新平東京市長の招請により来日、市政への助言のほか、全国で講演活動を行った。1923年関東大震災の際にも再び来日、復興計画を支援した。鶴見祐輔、蝋山政道、高木八尺、前田多門など、日本の知識人に大きな知的影響を与えた。著書に『共和国』『ルーズベルトの責任』など。

＜近代日本と「後藤新平山脈」100人：藤原書店＞



（1874年～1948年）

【ニューヨーク市政調査会をモデルに東京市政調査会を設立】

新平が東京市長になって間もない大正10年（1921）1月、新平から米国にいた鶴見祐輔に電報が届いた。「米国市政の腐敗並びにその矯正運動に関し、至急調査して報告すべし」というのであった。鶴見は、その前年ニューヨーク市政調査会で、ビーアド博士の講義を聴いたことを思い出した。すぐ手紙を出すと、鶴見を招きこう話した。

「米国市政の腐敗は久しいことでしたが、その改革運動はしばしば試みられて、常に失敗しました。それは、人道論では市政のような複雑な仕事の改革はできなかったからです。そこで、科学的に研究調査して如何にすれば悪政ができなくなるかの根源を突き止めることにしました。それから抽象的な善政論から一歩進んで、具体的な政策を市政のために提供することになりました。この目的のために有志家によって組織されたのがニューヨーク市政調査会で、その結果市政改革論者は、具体的な政策を持つようになり、また市政の現実的な検討も可能となり、次第に市政の腐敗が跡を絶つようになってきたのです。これが市政の腐敗を防ぐ、唯一の恒久的方法だと思います。故に東京市のために材料を送られるのでしたら、ニューヨーク市政調査会に赴かれて、これを研究してご報告なさい。」（その後、東京において市政調査会設立の計画が着々と進むこととなります。）

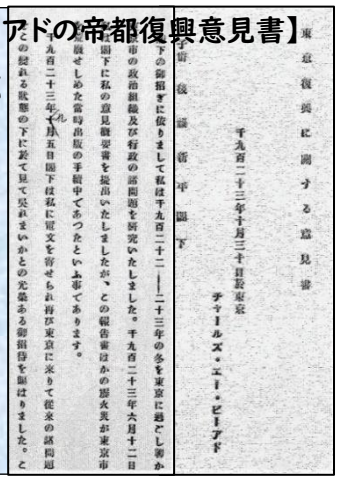
【ビーアド博士来朝歓迎会：丸ノ内銀行倶楽部】
加藤首相・米国大使ワーレン・内田外相・徳川貴族院議長・清浦枢府議長・渋沢子・井上日銀総裁等、朝野の代表的人物20余名を招待。

【帝都復興の強力な助言者】

山本震災内閣成立の日、親任式から帰ってくると、新平はすぐ「ニューヨークのビーアドに電報を打って、すぐ来るように言ってやれ。」と鶴見に命じた。「震火災のため東京の大部分は破壊されたり。徹底的改造を必要とす。でき得れば直ちに来られたし。短期の滞在にてもよし。」すると、それと行き違いに、ビーアドの飛電に接した。「新街路を設定せよ。街路決定前に建築を禁止せよ。鉄道ステーションを統一せよ。」

ビーアドが、急遽太平洋を渡って、日本の土を踏んだのは10月6日。以来彼は、政府及び市の当局と、幾度となく会見しては、新平に向かって、有力なる進言をなした。その進言は、後に10月30日、長文の覚書として、一括して新平に提出された。ビーアドの進言は、急所に当たれるもの多く、実際の復興計画樹立に際して、最も有力なる参考となった。

【ビーアドの帝都復興意見書】



東京復興に関する意見書

子爵後藤新平閣下

千九百二十三年十月三十日於東京

チャールズ・エー・ビーアド